

親鸞の著作中に、末法という時代認識を窺わせる言葉は少なくない。その中、親鸞の末法観を示すものとして、『教行証文類』『化身土文類』聖道釈の文を挙げることができる。

「まことに知んぬ、聖道の諸教は、在世・正法のためにして、まったく像末・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乖けるなり。浄土真宗は、在世・正法、像末・法滅、濁悪の群萌、斉しく悲引したまふをや」

これは、聖道の諸教に対して、浄土真宗は在世正法のみならず、像末法滅の時に到るまで、その効力を失することなく、濁悪の群萌を救い続けることを明かしている。

このことは『大無量寿経』の教説に対する絶対的な信順を示すものということができる。

親鸞は、真実の教を『大無量寿経』と示し、その『大無量寿経』に説き示される本願名号を聞信することにより得る証果を「浄土の真宗」という「証道」として明らかにした。

その本願名号を聞信する、真実の信心を得たる人を「真の仏弟子」という。

「信文類」には「真の仏弟子」を釈して、「真の仏弟子といふは、真の言は偽に對し仮に對するなり。弟子とは釈迦・諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行によりてかならず大涅槃を超証すべきがゆゑに、真の仏弟子といふ。」と示す。

「かならず大涅槃を超証」すべき者であるから「真の仏弟子」とするのである。『末灯鈔』には「この信心の人を真の仏弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は、〔阿弥陀仏〕撰取して捨てたまはざれば、金剛心をえたる人と申すなり。(中略) この人は正定聚の位に定まれるなりとしるべし。しかれば、弥勒仏とひとしき人とのたまへり。これは真実信心をえたるゆゑに、かならず真実の報土に往生するなりとしるべし。」と、それは正定聚の位に定まれる人であり、また弥勒仏と等しき人であり、必ず真実の報土に往生すると示す。

さらに「弥勒仏とひとしき人」という「便同弥勒」を釈して、

「まことに知んぬ、弥勒大士は等覺の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三會の暁、まさに無上覺位を極むべし。念仏の衆生は横超の金剛心を窮むるがゆゑに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。」とする。弥勒菩薩と念仏の衆生を對比しながら、他力の信心を得た念仏の衆生は、臨終即時に大涅槃を証することを示している。

そして、真仏弟子釈の結釈には

「まことに知んぬ、悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。」どこまでも虚仮不実であり、真実心、清浄心なき身を悲嘆し、現にいま正定聚の位にあり、大涅槃を超証すべき身でありながら、そのことさえも喜ばない身を深く恥じ嘆いている。

ここに親鸞の「真の仏弟子」の特色がある。必ず大涅槃を超証すべき身であるとともに、虚仮不実の「出離之縁あることなき」身であることを深信（機の深信）するのである。

本発表では、親鸞の末法理解とその背景、その末法の時代における仏弟子を「真の仏弟子」として示したことを中心に見ていきたい。

キーワード 親鸞・末法・真仏弟子